

ヨーロッパ中世の宗教詩と宗教的思惟

植 田 重 雄

はじめに

ヨーロッパの中世の彫刻をみると、ひじょうに素朴といってよい芸術からはじまっている。これはすでに古代奈良朝文化、平安朝文化を形成してきて、そののちに展開する日本の中世と、言葉は同じでもいちぢるしく異っている点である。ヨーロッパ中世の芸術、すなわち、初期ゴシック芸術は、南方から北上するキリスト教の宗教文化の波及によってやがて生れたものであるが、ほとんど原始芸術といってよいほどの素朴なところが強くでている。キリスト教はすでにギリシアローマの古典文化を継承しているといわれながらも、その芸術的表現は一般に素朴で原始的なものの受け取り方からはじまるのである。これは文化様式の上だけでなく、芸術家ひとりの生長においてもあてはまることかもしれない。

普通、ヨーロッパ人に高度の生活様式があつて、そこへキリスト教が新たに流入したかのように考えられやすいが、事實はそうではない。ヨーロッパ人たちはキリスト教をとおして、文化というものをはじめて知り、且つ学んだというべきである。キリスト教というと、すぐある独特の宗教形態ととられやすいが、それは今日の形態であつて、中世の初期には、信仰だけではなく、農耕牧畜の高度の技術体系を教え、医術、天文、地理、あらゆる生活全体に必要な知識の体系をたずさえていた宗教文化であるといえる。こうした形態をとるのは、仏教の場合も同じであつた。それは宗教的信仰とともに知識体系を包含したものである。それだけではない、ときには、異質の文化をその中に包含吸収して

いることもあり得た。仏教の場合には、老荘や儒教の思想をもあわせもっていた。その点で、キリスト教も同じであり、ギリシャ・ローマ文化を自己の中にとり入れていたし、それらをいかに統合させるかは、キリスト教の思想史の上でつねに重大な課題であった。^{ワイン}葡萄酒はヨーロッパ独特のものであると考えているが、葡萄の栽培もワインの醸造もいずれも北上したローマ人とキリスト教が伝えたものである。一事が万事であって、地中海文明の影響をうけて、国家の諸制度などもみな学んだのである。すべて文化らしきものは中世からはじまったといえる。家畜の飼ひ方、殖し方、またいかにこれをして野獣から防禦するか、そうしたことから学んでいった。だが、このような受容の中から次第に自己の特質をあらわしてゆくようになる。彼らに多くの影響を及ぼしたキリスト教自身が、次の時代にはいると、彼らの民族性や気質、精神性によって練り磨かれるようになるのである。ヨーロッパ人たちは、ローマから布教に訪れた神父や伝道者たちからキリスト教を伝えられたが、やがて、自分たちの中から神父や修道僧を輩出し、キリスト教を自分のものとして思索し、その思想を体験するようになる。神秘思想家、宗教詩人、神学者、芸術家が感じたり、考えたり、書き残したものは、じょじょに中世をいろどり、光となって四方に散らばる。中世は暗黒時代だというのは、まったく誤った評価である。かりに中世が暗黒時代であることを認めるとすれば、近代も現代も一層暗黒時代であるといわねばならない。数年前、すでに、「神秘思想とゴシック彫刻、—中世ドイツを中心として—」（早稲田商学 195 号、昭和42年）、「聖母伝承と宗教芸術」（同 205 号、昭和43年12月）などで、種々考察もし、論じてもきたので、ここでは、中世の神秘思想の宗教的思惟と宗教的抒情詩の特質をみてゆくことに主眼を置きたい。

1.

旧約聖書の中のソロモンの「雅歌」（Sir ha-Sirim）については、すでに「雅

歌雑考」(早稲田商学 150 号, 昭和36年1月) でその全体の構想についてくわしく考察をおこなったことがある。この「雅歌」は、イスラエルの羊飼の若い女性を主人公にして、村の青年(又はソロモン王)との愛を歌った作品である。ソロモンはシユナムの羊飼の娘の美しさに魅せられて懸想するが、娘は決然と拒絶して、恋人である村の青年との愛を完うする。この「雅歌」の主題は、「貧しいシユナムの乙女が、自己の愛と自由のために最後まで誠実をもって闘ったという単純で素朴な美しさにある。」(同, 107 頁) と結論できる。「雅歌」は、青年男女の素朴な愛を歌った作品であるから、聖書にはいっていることが不自然に見えるかもしれない。だが、イスラエルの人々は、「われはなんぢのもの、なんぢはわがもの」(6ノ3) という恋人の告白の中に、神と人間の純粋な関係の比喩を見た。人間の表わし得る愛の表現が、しばしば聖なるものと人間の人格関係となるのは、宗教上の普遍的感情性である。

ところが、初代キリスト教神父は、これを発展させて、花むこ(青年)はキリストであり、花よめ(乙女)はキリスト者(又は教会)であるという比喩的解釈を行っている。これは決定的な釈義として今日にまで及んでいるのである。だが、ヨーロッパ中世はこれをたんなる比喩的解釈にとどめず、神秘主義は自己の体験内容として実現させてゆくのである。

その具体的な実例、しかもすぐれた詩的結晶を十字架の聖ヨハネ(San Juan De La Cruz)にみることができる。彼の神秘体験をあらわす「魂とキリストの間の霊歌」の詩は、神と人間関係を次のように歌う。

(花 嫁)

いずこに隠れ給うや
愛しき御方、
嘆きの淵にわれを沈ませて
鹿のごとく

姿をかくし給うは。
われに心の痛みのみ残して……。
(泣きつつ)なんちを追いて、
外に出でしとき、
はやなんちの御姿は見えざりき。

羊を追いてかの丘へ
牧場にゆく羊飼らよ、
わが慕いまつる
彼の御方に、
道すがら逢うことあらば、
告げ給えかし。
われ思い悩み、
苦しみて死ぬばかりなりと。

われはわが愛しむ御方を求め、
歩みゆく。
山を越え、川を下り、
われは花も摘ず、
野の獣をもおそれず、
おそるべき敵、国の境をも
あえて過ぎゆかん。

(被造物への問い)
いとしき御方の手によりて、
植えられし樹々と森よ、

花にて飾られし緑の牧場よ、
 なんぢらの中を
 彼の御方は通り給わざりしや。

(被造物の答え)

数多の賜物をまき散らしつゝ
 かの御方は足早く
 森をぬけてゆき給へり。
 つぎつぎに彼等に
 目を注ぎつゝ、
 その御目にふれるるによりて、
 森の中のものは
 美しき装いを与えられたり。

(花 嫁)

あゝ誰かわれを癒し得ん、
 今よりはのこるくまなく
 なんぢを与えませ、
 今よりは、使者を
 送り給いそ。
 わが望むことを、
 ついに誰もなんぢに話し能わざれば。
 なんぢを思う者は、
 すべてなんぢの溢るる恵みを
 語らんとせり。
 そはわが心を

さらに傷ましむ。
おぼつかなく彼等が語るは、
まことにわれに死をもたらすのみ。

おお、わが生命よ、
生くるに適わしからざるところにて
いかに生くるを得ん。
愛する方を想う想いは、
矢のごとくとなりて、
深傷を負わせたり。

なにゆえこの心を
なんぢは癒し給はざるや、
この心を傷けしはなんぢなり、
われをひそかに傷つけ給いて、
なにゆえかく捨て置き給うや
なにゆえすべて捨て去り給わざるや。

わが焦慮を鎮め給え、
なんぢのほかにもその力あらざれば。
なんぢのみ姿、
わが目の前に現われ給えかし、
なんぢこそわが眼の光、
なんぢを仰ぎ見るためにのみ、わが目はあり、

なんぢ姿を現わし給え、

なんぢの美をまのあたり見なば、
 われは息絶えなん。
 愛ゆえに病める者、
 愛する御方のもとに在るよりほかに
 癒さるるすべなきを
 なんぢは知り給うなり。

おお、水晶のごとき泉、
 なんぢの水の白銀の鏡に
 わが限りなく求むるかの眼差し、
 おぼろげにわが想いえがく
 かの眼差しを、
 今、ただちに映し出せかし。

目をそらせ給え、
 愛しき御方、
 われ飛び翔りてもなんぢの御許に至らむ。

(花 婿)

帰り来れ、わが鳩よ、
 傷つける鹿は
 丘のいただきに姿をみせ、
 なんぢの羽搏きのやさしくおくる。
 微風にわが心は和ぎゆく。

(花 嫁)

愛しき御方よ、
 なんぢはそびえ立つ山、
 緑深き静けき谷間、
 目を見はらせる島々、
 水音さやかなる河、
 愛しみあふるる微風のささやきなり。

また、暁の訪れ間近き
 静寂の夜、
 音なく流るる楽の調べ、
 泌みわたる寂しさ、
 また、生命よみがえらしむる
 愛の宴なり。

狡き狐を追ひ払い給え、
 わが葡萄園はすでに花盛りなれば。
 薔薇の花びらを編まむ、
 この山の上にたれも来るなかれ。

死の北風、吹くを止めよ、
 愛の時を目ざましむる南風よ吹け、
 わが庭を吹きわたり、
 かぐわしき花の香りをただよわせよ、
 愛する御方は、
 花の間にありて楽しみません。

(花 婿)

花嫁は願ひし園に入り来り、
 そこにて悦びを知る、
 愛する者のやさしき腕に
 今、うなじを傾けむ。

かの林檎の木のもとにして、
 われらは許婚者となりぬ
 そこにてわれはなんちに手を与え、
 なんちは医されむ、
 なんちの母と同じところにて。

軽やかに翔けりゆく鳥よ、
 獅子よ、牡鹿よ、はねる野鹿よ、
 山よ、谷よ、岸よ、
 川よ、風よ、熱気よ、
 眠りをうばう夜の恐怖よ。

妙なる豎琴を奏で、
 人魚は心を酔わす歌をうたい、
 怒りをしずめよと願う、
 壁にふるるなかれ、
 花嫁が安らかに眠らんがために、

(花 嫁)

なんちの御跡を慕い、

乙女らは行けり。
 火花に触れ、
 香りよき葡萄に酔い、
 神の香油の芳しきを
 ただよわせつつ。

奥の酒倉に入りて、
 愛するかの方よりわれは飲む
 かくて、そこより出でしとき、
 広き野原、見のかぎり、
 わが知れるものは、
 もはや何もあらず。
 わが追い求めものの群も
 消え去りぬ。

.....
 わが魂はすべてをもちて
 彼の方に仕えまつる。
 われははや家畜の群を守らず、
 他になすべきことを知らず、
 ただ愛することのみわがなすべき務となりぬ。

.....
 爽やかなる朝にえらびとりし
 花とエメラルド、
 われらはこれを花環に編まむ、
 なんぢの愛によって開きし花を、
 わが髪に編む。

わがうなじにゆらぐひとすじの髪に
 なんぢは目をとどめ
 それに心奪われぬ。
 わがただ一つの眼差しは
 なんぢの心に痛みを与えぬ。

なんぢがわれを見つめしとき、
 なんぢの眼は
 われに美を刻みたり。
 なんぢはかくも
 われを愛し給う。
 わが眼もなんぢの内部に見ゆるものを
 拝するにふさわしくなりたり。

われをさげすみ給うなかれ、
 われ色黒くとも、
 今よりなんぢはわれを
 よく見む。
 すでになんぢは
 われを見て、
 愛と美を、
 わがうちに残したればなり。

（花 婿）

白き小鳩はオリーブの小枝を携え、
 箱舟に帰り来る。

ついに山鳩は、
 憧れの伴侶を、
 緑の岸辺に見出せり。

山鳩は孤独に生き、
 かくてついに孤独のうちに巣をつくれり。
 孤独の中に導くは、
 ただひとり、彼女が愛するかの人、
 彼もまた孤独のうちに
 愛に傷つく。

(花 嫁)

愛する御方よ、なんぢも
 われと同じ喜びを味わい給え、
 いざ、なんぢの完き美の光を見るべく、
 清き泉の湧く山や丘に、
 深き茂みの中に
 さらに深く踏み入らむ。

しかして、かの岩の高み、
 奥深くかくれいる洞に赴かむ。
 その中にわれらはかくれ、
 柘榴の果酒を味わん。

そこにて、わが魂が願ひしものを、
 なんぢは示し給わん、

わが生命なるなんぢが
過ぎし日にわれに与えしものを、
今ただちに賜わらん。

微風吹き、
小夜啼鳥の歌きこえ、
魅惑の森、
澄みわたる夜に抱かれ、
燃ゆる焰により、苦悩はきえゆく。

今は、たれもここに来ることなし、
アミナダブも姿を見せず、
包囲はとけ、
騎士たちも水あるを見て、
馬を降りてくだり来れり。

この詩は「魂とキリストの間の霊の歌」(Canciones Entre El Alma y el Esposo)と呼ばれている。「雅歌」以外の旧約聖書のいろいろの要素を題材にしているが、「雅歌」が大部分の要素であることはいうまでもない、注目すべきは、「雅歌」において、「シユナムの村の羊飼の乙女」、「村の青年」、「ソロモン王」が、「花嫁」と「花婿」の対話(対唱)に変わっていることである。「霊の歌」は、花嫁花婿が愛の悩みを語り、現実の人間の官能的な比喻を藉りながら、「雅歌」の比喩的解釈よりもはるかに、宗教的な内容にひろげてしまっている。「愛の傷」の癒されるのを待つのは、神と出合いの待望となる。のちに聖ヨハネは、イエズス会のアンナ修母の求めに応じてこの霊の歌に自ら註解をおこなっている。自己の詩作品であるにもかかわらず、註解を必要としたのは、その作品の

宗教的な内容を人々に誤って解釈されなくなかったからである。

「これらの歌は神への愛にたいする特殊な熱情をもって書かれている。神の知恵と愛とはじつに宏大無辺で、知恵の書に、『力強く、はてよりはてにまで及ぶ』(8ノ1)とのべられている。この愛によって教えられ、動かされる靈魂は、この愛と同じ豊かさと激しさとをもって語るのである。……われらの弱さを助ける主の霊が、われらのうちに住まわれ、聖パウロがいつているように、われらが自分では知ることも、理解することもできず、はっきりいい表わせないことを、『いいがたき嘆き』(ロマ8ノ26)でもってわれらのために願ってくださるからである。その上、霊は、自らの住いとした愛に燃える人間の魂に知らせることを、だれが書きあらわすことができるか。かれらに感じさせることを、だれが言葉で表わすことができるであろうか。……それゆえ、このような靈魂は、象徴や対比や比喩を用いて、自己が感じていることの僅かでも暗示し、理論的に説明せず、むしろ豊かな魂の中から神秘的な秘密をあふれ出させるのである。これらの比喩は、愛の霊の単純さをもって読むのでなければ、道理に叶った言葉と考えられず、むしろ愚かしいことのように見えるかもしれない。『ソロモンの雅歌』、その他、聖書中の書に見られることは、まさにこれであり、そこでは聖霊は深い意味を平凡な日常の言葉でいい表わせぬために、異常な象徴や比喩をもって、その奥義を語ろうとする。……それゆえ、豊かな神秘的知識にみちた愛の働きによるこれらの詩を、正確に説明するのは不可能であり、それは私の目ざすことではなく、ただ、一般的にいくらかの光明を与えるだけにすぎない。……愛という言葉は、各自が自己の霊性の様式、また自己の精神の能力に応じて利用できるように、きわめて広い意味に説明さるべきものである。」(霊の歌、序)

この作品が、どのように読まるべきか、作者はまず初心者(詩についてのそれではなく、宗教に生きる導きとして)のために、さらに初心者(の域を脱して)の神秘的真理を会得するために書かれている。ヨハネは、スコラの大学者のような

道を歩まなくとも、人間それぞれの宗教体験によって、大きな喜びを持ち得ると、自己の確信を語る、「たとい、あなたに、神的神秘真理を会得させるスコラ神学の修練が欠けているとしても、愛によって教えられる神秘神学の修練に欠けてはいないのだ。後者によっては、たんに超自然的真理を知るばかりでなく、さらにそれを味わうのである。」(同)

そして、この霊の歌は、人間の「一つの靈魂が神に奉仕しはじめてから徳を完成するところまで」、これを彼は「靈的結婚」と呼んでいる。この神と人間の精神の親密な出会いをかく呼ぶ。徳の完成の道は、「浄化の道」、「照明の道」、「一致の道」の三つの状態を内容とする。初心の「浄化の道」を超えると、「照明の道」が拓けてくる。ヨハネはこれを「靈的婚約」と呼んでいる。さらに信仰がすすめば、「一致の道」にたどりつく。これをヨハネは、「靈的結婚」と名づけている。この最後の段階は、人間の完全な幸福、喜びの世界である。この三段階の境地を、ヨハネは花婿たるキリスト、花嫁たる人間の魂との対話交流として歌っているのである。

旧約聖書の「雅歌」は、素朴単純な村の羊飼の男女の相聞を歌っているにすぎない。ところが、ヨハネに至っては、ほぼ同じ題材を用いながら、純粹に内面の宗教的な作品として、新たに神秘体験に昇華させて、確固たる表現を獲得したのである。

ヨハネの作品には、これ以外に「魂の暗夜」(Noche Obscura Del Alma)がある。前掲の詩より一層ミステイックな内面性を歌っている。

暗き夜、愛の火に悩みつつ、
われは愛に焦る、
おお、聖なる出来事よ！
何人にも気付かれず、
われは外に出でゆく、

わが家は静かに闇に立てり。

暗がりの中に、しかも
 姿を変え、
 ひそかに階段^{きだはし}を登る——
 おお、喜びの瞬間よ！
 暗がりにわれを見る人はなく、
 静けき平安の中に、
 わが家は沈黙せり。

浄福の夜、
 何人にも知られず、
 一瞬、地上の光ならずして、
 否、わが魂の内奥の火は燃えて、
 主を垣間見ん。

おお、
 われを導きしは光、
 その光は昼の輝やきよりも明るく、
 われは彼の歩みを予感し、
 わが訪なう歩みを主は知り給い、
 われを待ち給う、彼のほかにわれ誰も求めじ。

おお、われらを導く夜よ、
 おお、昇りゆく太陽よりも麗しき夜よ、
 おお、愛する者と愛さるる者とが一つとなり、

愛する者を愛さるる者に変え、
 愛の旅を為さしむる夜よ！
 わが花咲く胸には、
 主のためのやすらぎの場あり、
 彼を胸に宿すとき、
 香柏のかぐわしき微風とともに、
 彼の在まし給うを感じ取る。

そそり立つ塔に風の吹くごとく、
 われは彼にまつわり戯むれる。
 彼は愛の快き傷をわれに与う。
 歓喜の苦痛もて
 われはそこに沈みゆく。

忘却の喜びにひたり、
 わが顔を愛する者にうずめむ。
 一切のものは忘却されて　　，
 そこにまどろみ、
 百合の花のただ中にありて、
 わが想いは浄めらるるなり。

十字架の聖ヨハネは、スペイン中世の神秘詩人最高の人であるといわれる。彼は1541年にカスティラ（Kastila）の貧しい家に生れた。はじめジェシットの学校にはいり、病院の看護夫をつとめたこともあるが、カルメル会にはいり、サラマンチヤの大学で四年学んだという。1567年、聖テレサ（Santa Teresa）と知り合ったが、二人は地上的な愛ではなく、同じ宗教的な理想に共

鳴した。1577年教会の教えをみだす者としてヨハネを訴える者があり、フィリップ二世は投獄した。トレドに八ヶ月入牢し、やがて救出されてカルメル会の僧院に逃れ出た、「魂の暗夜」はこの時の牢獄の中からカルメル会へ赴くときの宗教体験を歌ったものではないかとおもわれるふしが多い。ヨハネはカルメル会において、宗教の改革を考えていた。そのことが、他の人々の反感を買ったらしい。とにかく、キリスト教の改革のために、彼はまず自己にたいする厳しい戒律と苦行を課し、その生活を生涯つづけた。そして、神にたいする燃ゆるがごとき渴望と憧憬、そして歓喜を詩に歌ったのである。

「暗夜」はむろん神秘的な神の愛の比喻であり、聖なる暗さ、聖暗であり、普通考える暗さや暗黒ではなく、「かがやく暗さ」である。ヨハネによれば、キリストとともにある喜びであるといえよう。自己所有の慾望からはなれ、神を憧憬渴望する心を歌い、やがて、神の光、輝やく暗夜の中に神と出会う。彼の魂に神が安らうことにより、人間は自己の狭い限界を破り、母と子の関係のごとき喜びを味わう。この詩には、神と人間の結合の喜び、沈黙の安らぎの世界があり、忘我と聖化の世界がある。この詩には、有限な存在である人間の罪を浄める「浄罪」(Purificatio)があり、暗夜に浸りながら静かに瞑想する「静慮」(Contemplatio)があり、神と一体になる法悦の「結合」(Unificatio)の三つの神秘の内容が歌われている。聖ヨハネには、宗教詩以外に、多くの箴言風の言葉が断片的に伝えられ、遺っている。その二三を挙げると、つぎのごとくである。

「無限を楽しもうとおもうならば、有限の味を求めてはならぬ」。「無限の知識に達しようとするならば、有限の知識を棄てなければならぬ」。「無限の中にはいろいろとするならば、汝自らを無とせよ。なんぢが被造物の中に留まるや否や、無限への歩みは停止する」。「すべてのものに喜びを得ようとおもうならば、無に喜びを求めよ。この世にあっても、愛は神に達することができるが、知識は達し得ない」。

さらに宗教的瞑想の濃い作品は、つぎの「泉」(La Fonte)であろう。

夜も、
湧きいつる泉をわれは知る。

永遠の泉の源は見ゆることなし、
されど夜もひそかに
溢れいつるをわれは知る。

われはその源を知らず、いかなる源をももたず、
されど、夜も流れて一切のものの源はここより始まる。

かくも美しきものをわれ知らず、
夜といえども、
この泉を飲みて天地はよみがえる。

この泉は深さ知られず、
夜もその涯の岸べに、
何人も到り得ざることをわれは知る。

かくも澄みてかがやかしき泉は他にあらじ、
夜も、
そこよりすべての光が生れくるをわれは知る。

この泉の流れ、豊かに、
溢れるをわれは知る。

夜も、
 その水は国々を潤ほし、
 天と地の深みを波立せゆく。

この泉より他の諸の泉流れいつ、
 夜といえど、
 それらはこの源の泉と同じく、
 力にあふるるを知る。

この永遠の泉はひそかに生けるパンの中にあり、
 夜も、
 われらに生命を与うるなり。

夜といえど、
 この生ける泉によりて、
 暗闇と大水の中に創られたるわれら被造物に
 呼び求められつつ、
 このものは在し給う。

わが憧るゝこの生ける泉は
 夜といえど
 今わが見る、
 生命のパンの中にあり。

この「泉」の詩の発想は、修道院の泉を聴いてではあろうが、宇宙的なひろがりをもち、永遠の生命の象徴的なものになっている。それは言葉で^{ロゴス}であり、キ

リストである。聖ヨハネの詩的力倆は、このようにキリスト教の神学を詩の中に単純化していることである。聖ヨハネの「暗き夜」、「泉」は、人間に方向性を与える永遠の神秘である。

2.

聖暗を歌う十字架の聖ヨハネと対照的な聖者は、アッシシのフランチェスコ (Francesco D'Assisi) である。フランチェスコは、1181年イタリアのアッシシに生れた。当時アッシシの周囲のイタリアの諸都市、諸侯は戦乱に見舞われることが多かった。彼ははじめ中世の騎士に憧れたことがあったらしい。その当時のフランスの吟遊詩人の詩句を好んで口ずさんだと伝える。当然中世の騎士をたたえる武勲詩にも熱中したらしく、聖フランチェスコは神の吟遊詩人であると名乗り、讃歌を歌い、厳肅で英雄的な禁欲の行者となる。彼の生涯は神への遍歴の騎士の性格をもつ。村から市へ、あるいは街道を弟子たちと旅しながら、ときには町や村の広場で、神の教えを人々に説き、詩を朗唱した。この聖者の生涯とその弟子たちを伝えるものに、「聖フランチェスコの小さき花」(I Fioretti Di San Francesco) がある。彼ののこした詩の中で、つぎの「太陽の讃歌」(Canticum Fratris Solis) は広く知られている代表的なものである。

至高全能の善なる主よ、
 讃美と栄光と誉れ、
 すべての祝福はなんぢのものなり。

これらはすべてただひとり、
 至高のなんぢに帰すべきもの、
 まことになんぢを語るに
 ふさわしき人はこの世になし、

讃美されよわが主よ、
なんぢのすべての被造物によりて。

とりわけ、高貴なる兄弟太陽によりて讃美されよ。
太陽は昼をつくり、
主はかれによりてわれらを照らす、
太陽は麗しく、
壮厳に光り輝く、
至高のなんぢよ、
太陽こそなんぢのしるしなり。

讃美されよ、わが主よ、
姉妹なる風と限りなき星によりて。
なんぢはこれらを天にちりばめ、
清く明らかに美しく創り給う。

讃美されよ、わが主よ、
兄弟なる風によりて。
また、大気、雲、青空、
すべての気象によりて
なんぢは、これらの兄弟によりて、
すべての被造物を支え給う。

讃美されよ、わが主よ、
姉妹なる水によりて。
水は有益にして謙虚なり、

また貴くして純潔なり。

讃美されよ、わが主よ、
兄弟たる火によりて。
なんぢはこの火によりて夜を照らさしむ、
火は美しく、快活に、
力強く、すこやかなり。

讃美されよ、わが主よ、
われらの姉妹、母なる大地によりて。
大地はわれらを育くみ、培い、
さまざまの果実、
とりどりの花と草を産む。

わが主を、讃美し、
祝福し、感謝せよ、
大いなる謙虚もて、
主に奉仕せよ。

この讃歌は、一挙に全部創られたものではない。とくに以下にのべる詩句は晩年の生涯の終りに近づいて辛うじて生れたのである。

讃美されよ、わが主よ、
なんぢへの愛のために
ゆるしを与える人々によりて。
病いと苦難に耐え忍ぶ人々によりて、

祝福されよ、安らかに耐えしのぶ人々よ、
 彼らは至高のなんぢより、
 永遠の栄冠を受けん。

聖フランチェスコは盲目になっていた。アッシシの町の広場で、この詩句が彼の弟子によってうたわれると、会衆たちは感激し、権力を争っていた行政長官と司教は和解し、抱擁し合ったという。この一節はアッシシの市民に送った許しと平和のメッセージといわれる。

1226年、聖フランチェスコは、死の近づいたことを知り、弟子たちに遺言を書きとらせた。これは弟子たちの大切な教えであり、のちにフランチェスコ派の信条の根幹となる。ある時、寝床のかたわらで、弟子のアンジェロとレオネに「太陽の讃歌」を歌わせた。二人はすすり泣きながら歌った。やがて彼は最後につぎの詩句を加えて歌うようにいった。

讃美されよ、わが主よ、
 姉妹なる肉体の死によりて。
 生ある者、この者より逃れ得じ、
 死すべき罪に
 死ぬ者は呪われよ、
 されど、なんぢの最高の御旨を
 見出せし者は祝福されよ、
 なんとすれば、もはやこれらの者は、
 第二の死も傷うことなればなり。

「太陽の讃歌」は、この最後の詩句が加えられて完成する。いいかえれば、この最後が生れたのは聖フランチェスコの死の前であった。これを完成するた

めに、生涯この讃歌を背負ったともいえる。フランチェスコの願いにより、アッシシのボルチウンクラに病床を弟子たちは移した。1226年10月3日、詩編142篇を口ずさみながら彼は世を去った。

この「太陽の讃歌」（厳密には、兄弟なる太陽の讃歌）は、自然を神とみる近代の汎神論のように考えていない。したがって、ロマン派のように自然と一つになるようなことはない。太陽、月星、水、火、大地、いずれも創造の主なる神の中における兄弟姉妹である。父たる神の国は、多くの邸や部屋があるが、すべての存在はその家族の一員である。聖フランチェスコの伝記作者の一人チェラーノはつぎのようにのべている。「フランチェスコが被造物のうちに、神の権能といつくしみを見出して示す感動を、どのように表現したらよいだろうか。彼が太陽や月や星を眺めて味わう喜び、草花の美を静観して、その香りを感じた喜びを、どのように描き出すことができようか」、「完全に特別な能力によって、フランチェスコの心は全被造物の秘密を見抜く力を持っていた」（チェラーノⅠ、199、58—61、同Ⅱ、100、165—171）

彼は小さな生命を大切にした。路上の虫を踏みつぶさぬように、つまんで端の方に置いてやり、冬になると蜜蜂のために、蜜と暖かい葡萄酒を巣のそばにおいてやった。雉鳩のために巣を造ったりした。聖者にグレッチオの小うさぎは小犬のように彼のあとにつき従い、リエッティ湖のかわせみと魚は彼の祝福を求めにやって来た。彼が呼ぶとすぐ飛んできてボルチウンクラの蟬は一しょに神の讃美を歌ったという伝説がある。

もっとも一般的に知られているのは、小鳥に聖フランチェスコが説教したという話で、これはジョットーのフレスコ画に画かれて一層有名である。「小さき花」によると、彼は兄弟たちをつれてピアン・ダラルカというところに赴いたとき、数本の樹立と野原に今までに見たこともないほど、おびたしい小鳥がいた。彼は感嘆し、弟子たちに待っていてほしい、兄弟である小鳥たちに説教してくるからといって、そこへ近づいて語りはじめた。「わが小さき兄弟なる

小鳥よ。われらは神より多くの恵みをうけている。お前たちのつとめは、いつも、どこでも神を讃美することである。神はお前たちに、好むところに飛ぶ自由を与え、幾重にも重った美しい羽根でよそおっている。……お前たちは、種まくことも刈り取ることもせず、神に養われている。喉を潤す泉や川、身をかくまう山や丘、巣をつくるための高い樹々を神は与え給うた。お前たちは紡いだり織ったりできなくとも、神はお前たちと子供たちに必要なよそおいを与え給うている。かくも多くの恵みを与え給うている創造主は、お前たちをどれほど慈しみ給うておられるか。兄弟なる小鳥たちよ、恩知らずにならず、かくも恵み深き主に、たえず讃歌をささげなさい」。聖者のこの無邪気な説教に小首をかしげたり、羽ばたいたりしながら、小鳥たちはじっと聞いていたが、やがて四つの群に分れて、地平線のかなたに飛び去っていったという。

聖フランチェスコの自然にたいする手放しの楽天主義は、彼の自然への限らない愛情でもある。彼は光り輝くものを美しいものとして喜び、花や水の流れ、小鳥を好んだ。とくに、水を好んだという。水は魂を潔め、聖なる贖いとなるからである。

「太陽の讃歌」の最初の着想は、1213年、聖ジェミニとポルカリアの間の小さな御堂にいたときに得たといわれる。その時はつぎのような讃歌であったらしい。「主をおそるものすべてよ、主を讃美せよ、主を讃美せよ、天と地よ。すべての川よ、主を讃美せよ、すべて創られたる者よ、主を讃美せよ、すべての天の鳥よ、主を讃美せよ」。このような讃美の歌は、詩篇にもいくつかその類型が見られる。

だが、この讃歌は、やがて具体的に太陽と火の讃歌となって形をとりはじめる。しかも、さきにあげた最終の形にきまるまでに、つぎのように歌われていたらしい。

朝、太陽の昇るとき、

すべての人々は
これを創り給いし神を讃美す。
すべてのものは太陽によりて
見ゆるごとくなるがゆえに。

やがて夕が夜となるとき、
われらの眼に光を与うる、
兄弟なる火のために、
すべて人々は神を讃美す。
われらすべて盲目なれど、
神はこれら二人の兄弟によりて、
われらの眼に光を与え給う。

これが、「太陽の讃歌」の原型であつたらしい。「小きき花」によれば、あるとき、弟子のレオが「完全なる徳」とは何かとたずねると、聖フランチェスコはつぎのように答えた。「もしサンマリアまでゆく道で雨にうたれ、寒さにふるえ、泥にまみれ、空腹となつて、ある家の門を叩き、一夜の宿を乞うと、番人が『あなた方はだれか』とたずねる。そのとき、『われわれはあなたの兄弟です』という、と、『嘘をつけ、世聞をうろつくこの祿でなし奴!』とわれわれを番人は追い出してしまふ。この仕打ちにじつて耐え、彼が神からわれわれのことについて語りかけられ、われらのことが真に分ってくれるならば、それこそ完全な喜びである。だが、もしその番人がわれわれを叩いて追い出したら、貴きキリストの苦しみをおもひ、これらのことに耐えて喜び、キリストの愛のために耐えよう。これこそ完全の徳である。兄弟レオよ、キリストが友(人間)に与え給うた聖霊は、自己を超克するそれである。キリストの愛のために、すべての苦しみを耐えしのぶことである」。

晩年、盲目となった聖フランチェスコは、肝臓なども悪くなっていたらしい。ある夜、サンダミアーノの庵室で「主よ、われを救い給え、わが病いを耐えしめ給え」と祈った。するとこの祈りに答える声は、「フランチェスコよ、喜びなさい、なんぢは、病いと弱さの中で歌いつづけよ、神の国はなんぢのものなり」ときこえた。この声に歓喜法悦にひたったフランチェスコは、翌朝、「もしも皇帝が全ローマ帝国をわたしに与えたとしても、これほどに嬉しいとは思わぬ。わたしはこの試練を喜びとしよう。父と子と聖霊に感謝するのがわがつとめである。」彼は被造物の神への感謝をこめて讃美の歌を完成しようとするのである。ヨーロッパ中世において、キリスト教はあまりに神と人間の関係にのみ関心を置きすぎて、自然と神と人間の関係を忘れていた。アッシシの聖フランチェスコによって、自然は神と人間の間にその占むべき位置を占め、じつに生々と明るい生命を脈打ちはじめた。彼は空に翔けのぼりつつ歌う小鳥に自己をたとえ、みずから神のトルバドールを名乗った。この宇宙の一切の存在は神からの直接の言葉であると彼は信じた。彼は無限に大きな被造物にも、無限に小さな被造物にも、神への讃美と感謝を感じ、神の現存を知ることのできる人であった。この聖者については、語るべきことはあまりに多いが、最後に彼の「平和への祈り」を掲げよう。

主よ、われをなんぢの
 平和の器とならせ給え、
 憎しみのあるところに
 愛の種を、
 非道の行わるるところに、
 許しを、
 疑いのあるところに
 信仰を、

絶望のあるところに、
 希望を、
 暗闇のあるところに、
 光を、
 病いのあるところに、
 喜びをわれに蒔かせ給よ。
 聖なる主よ、
 われ慰むると同じく
 慰めらるるを求めず、
 われ知ると同じく
 知らるるを求めず、
 われ愛すると同じく
 愛さるるを願わず。
 われらが受くるは
 与うることの中にあり、
 われらが許さるるは、
 許すことの中にあり、
 われらが永遠の生命に生くるは、
 死することにあればなり。

3. マイスター・エックハルト

マイスター・エックハルト (Johann, Eckhart, Ekehart) は1250 (1270ともいわれる) 年、ドイツのゴータ (Gotha) の近くのホッホハイム (Hochheim) に生れたと伝える。若くしてエルフルト (Erfurt) のドミニコ派の修道院にはいり、のちストラスブルグで神学研究を行った。これは当時、教団の教職につく優秀な人材のためのものである。エックハルトはエルフルトのドミニコ派の修道院

の院長をしていたが、やがて、卓越した神学者として重要視され、1300年にパリ大学に赴き研究をつづけ、1302年にはマイスター（Meister）の称号を得た。ドミニコ派教団は、彼の学的高さだけでなく、宗教的実務能力をも評価し、ザクセン州の総監督司教（Provinzialprior）につき、さらに、ボヘミア州において総監督の職につき、修道院内の改革をなしとげた。

1311年、エックハルトはドミニコ派のドイツ地区の首長に選出された。だが、教団は再びパリに彼を派遣した。パリ大学において神学講義をなしとげるためである。その頃同大学にはドンス・スコトゥス（Duns Scotus）が新しい主意主義の神学を唱えていた。任を終えてのち、シュトラースブルグ大学の神学教授となり、マギスター（Magister）の称号を得た。この時代に彼の主要な神学的著作が実ったといわれる。その後、ドミニコ派の修道院の人々、一般の聴聞者にたいしての説教を行うようになり、当時人々に大きな感銘を与え、説教の言句は人から人へ書写されていったという。

ところが、エックハルトの生涯における最大のそして最後の試練がおとずれる。エックハルトの説教を聞こうとする人々の数がますます増え、その神学に熱狂する者が急激に膨れていったことである。

1317年、シュトラースブルクの司教は、遍歴托鉢僧や自由精神兄弟団を異端の疑いありとして審問した。その中にはエックハルトの説教をきき、彼の信仰を是なりと告白した人々が多く、みな刑場で処刑された。これはエックハルトにたいする明かな敵対と見せしめであった。だがエックハルト自身には、カトリックにたいし宗教改革の烽火をあげ、民族的な政治運動を試みようとする意図はなかった。むしろ正しいキリスト教の教えの理解ということに中心があった。それゆえ、民衆にたいし、もし異端として審問されるようなことがあったら、はばからずわたしの名を挙げてよろしい、あるいはわたしを法廷に喚問しなさいとまで明言している。世を去る年の説教の中で、「なんぢがわれに与え給いしすべてのものをことごとくわれは彼らに与えん」というキリストの言

葉をエックハルトはつぎのように解釈する。神の子イエスが最初神から与えられた永遠の生命は、現在の人々も同じように直接自己の感受性で受けとるべきである。イエスの与える祝福は、当時の使徒たちと同じように直接受け取るべきである。『『これらの永遠の生命をわれは彼らに与えん』とキリストはのべているが、わたしがいつもいっているように、この『彼ら』とは、まさにあなた方自身なのだ、この解明のために、あなた方はわたしにあって慰められ、わたしはそのために生命をささげるのだ』とのべている。司教たちは、教会の立場から、一般民衆が教会をはなれて、直接救いを求めるごとき行為は、許しがたいことであった。多くの俗信徒にたいし、真実の信仰を曇らすようなこと、しかも公然と一般民衆の前で行うことが彼にたいする非難の中心であった。とくに、エックハルトの名声が高まるにつれ、彼の見解に反対する人々が増大した。彼は大胆に自己の宗教的見解を語り、すべての人間における内面的な心情態度の問題を重要視すればするほど、彼を異端の元凶として処断せよという気運がたかまった。

ケルンの大司教は、1326年異端の教説の流布者としてエックハルトを提訴した。皇帝と紛争中であった法皇は、シュトラースブルクのニコラウスに審理させた結果、無罪となった。ところが、ケルンの大司教は、ニコラウスをも含め、エックハルトとともに、自己の異端審問法廷に召喚することになった。彼はケルン大学の教義学の教授となり、ドミニコ派として、キリスト教神学の最高学府の指導者であった。このケルン大学にはアベラルドス・マグヌス (Aberaldus Magnus)、また、エックハルト以後、ドンス・スコトゥス (Duns Scotus) が教えている。審問官にはフランチェスコ教団の神学者が加わり、ドミニコス教団とフランチェスコ教団の対立となった。エックハルトは幾人かの重要な証人をともなって、審問官のもとに赴き、かかる法廷召喚の愚かさ、無意味を説き、キリスト教の真の信仰のために、アヴィニヨンの法皇の前で自己の正しさを立証しようと言明した。しかし、相手側はこれを黙殺した。彼はこの問題のため

に心痛が大きかったのか、1327年、アヴィニヨンに旅立つ前に世を去った。

ところが、反対者側はこれをもって終らせず、1329年、エックハルトにたいし有罪の教書を発せしめ、その著作、教説その他、彼の説教の書写などを読むことの禁止はむろんのこと、その焼却を命じた。さらにエックハルトの教えを信ずる者にも迫害が加えられた。エックハルトの作品に散逸してしまい、教会の壁に塗りこめて隠していたものが、100年後に改築の折に発見されるとか、数奇な運命をたどった話が多い。とにかく、一旦は異端の思想として忘却され、やがてのちに発見された。ドイツ最大の神秘思想家の運命がかくの如きものであった。それはゴーチック彫刻の巨匠ティルマン・リーメンスシュナイダー（Tillman Riemenschneider）のそれに比すべきものであろう（聖母伝承と宗教芸術 早稲田商学 205号）。異端審問の裁判などによっていかに迫害しようとしても、人々はエックハルトの深い信仰と思想、彼の人間的な高さと魅力を捨てることができなかった。彼のミスティックは、その後のドイツの宗教改革や思想の展開にずっと影響を与えつづけてゆく。エックハルトが残したものは、多くは神学上の瞑想から生れたものと、民衆に語った説教集が主なるものである。しかし、聖十字架のヨハネ、アッシシの聖フランチェスコとちがひ、彼は宗教詩を残さなかった。ただし、彼の思想の影響を濃厚に受けたのではないかとおもわれるミスティックの詩が若干伝えられている。エックハルトの神についての諸作品は語るべきことが多いが、まず「神の子の誕生」についてここで取り上げておく。

エックハルトは、よく中世に経験され、多くの人々も当然ミスティックの特徴と考えている恍惚陶醉にはきびしく批判的であった。彼のミスティックの出发点は、人間が神の子となる体験を、その魂の深みにおいて体験することである。かつてイエスは神の子としてベツレヘムを誕生し、神の子たるにふさわしい悲劇的生涯を終えたことは、聖書の中の各福音が語っているごとくである。それは、歴史的にみて唯一回の出来事であった（すべて一回性の出来事に歴史

の特質がある)。だが、「神の子」という問題を、人間の内面的な出来事として捉えてゆけば、まさに宗教のミスティックの体験となる。エックハルトは、中世の修道院や僧侶たちが日々勤行として祈りをささげ、沈黙し、瞑想にふけり、聖書を読誦する精神内容を、そのまま哲学化し、思想の生地に表示しているとおもわれるところがある。

たとえば、「永遠の誕生」は、すべてのものが深い沈黙の中にあるとき行われる。「父なる神は、その言葉を魂の中に語る。」この魂こそは永遠とその働きのためにある。この魂の根源は、深い沈黙にある。「この深い沈黙にのみ、父なる神が語りかけるその誕生の場所と安らぎがある。」人間の魂を神の言葉の誕生の場所たらしめるのは、キリスト教の心的態度の根本のものである。「心の友よ、さらに魂の高貴性に注目せよ。聖アウグスチヌスは、『神と魂とは、そのありさまを等しくしている。』』といている。魂が、恩寵によって神となるように、神の姿に似せて形づくり給うたのでないとすれば、恩寵を超えて神となることは不可能である。)(魂の高貴性について)

このような永遠の誕生は、魂の存在の中心の沈黙と静寂にありとエックハルトは考える。この魂の深みにおいて世界根源(Weltgrund)と出会う。ここに彼のミスティックの中心問題がある。人間の魂の中に閃めく閃めき(Funke, Funkelein)は、こういった出会いから生ずる。「人間はまさにそこに生き」真の人間としての誕生がはじまるのであるといえる。

エックハルトの宗教思想については、これはまだほんの序論にすぎず、問題がすべて今後にのこしている。予定の紙数がつきたので、それらについてはつぎの機会にゆずりたいとおもう。

引用資料および参考文献

- Meister Eckhart; Die Deutschen und Lateinischen Werke; Josef Quint, 1969.
- Meister Eckhart Schriften; Herman Büttner, 1959.
- Meister Eckhart der Mystiker; Adolf Lasson, 1968.
- Meister Eckhart Deutsche Predigten und Traktate; Josef Quint, 1955.

- Deutsche Dichtung des Mittelalters ; Friedrich v. der Leyen, 1962.
- Obras De San Juan De La Cruz ; Doctor de la Iglesia, Obras de San Juan de la Cruz ; P. Silnerio de Santa Teresa, C. D., ed., Burgos.
- Opuscula S. Francisci ; Wadding, Fioretti ; Sabatier. Franz von Assisi Legenden und Laude ; Otto Karrer.